

再帰代名詞と Intransitiv について

—— 心理学的一考察 ——

志 田 章

0

- (1) Als Gregor Samsa eines Morgens aus unruhigen Träumen erwachte, fand er sich in seinem Bett zu einem ungeheueren Ungeziefer verwandelt.
- (2) Er fühlte ein leichtes Jucken oben auf dem Bauch; schob sich auf dem Rücken langsam näher zum Bettpfosten, um den Kopf besser heben zu können.¹⁾ (下線は筆者による)

グレゴール・ザムザが或る朝目を覚ますと、「自分」が巨大な毒虫に変わっていることに気付き、その変わり果てた「自分」の姿を観察する件である。

彼は次第に自分に対する意識を失って行き、それと平行して彼の外部に対する意識も失い、ついには、グレゴールは自分の「人間としての過去を刻一刻とたちまち完全に忘れさせて」しまいかねない状態に陥り、かろうじて「親ゆずりの家具」と「母親の声」²⁾ が、彼を少し正気にかえすことになる。

上記2例文中の再帰代名詞 sich の先行詞は明らかに Gregor であるにもかかわらず、再帰代名詞は Gregor とは異なる或る別の存在者を意味している様にも思われる。

「自分」ともう一人の自分という対極的關係とは逆に、『失われた時を求めて』では、真夜中に目が覚め、精神が朦朧としている主人公「私」は、「最初の瞬間は、……動物の心の底にうごめいているような、ごく単純な原始的生存感を抱いている」だけであるが、少しずつ「私の本来の自我」

が、例えば、「石油ランプ」や「折襟シャツ」³⁾といったもののぼんやりと目に写る像によって回復されていくのである。

1

これらの例に見られる「グレゴール」と「私」の二つの「自分」は非常に対照的であり、同じ「自分」でも、それは或る時には明確な指示対象を持ち、また或る時には何等指示対象を有せず、極めて抽象的で曖昧な構成要素として文中に現れるのである。

さて、再帰代名詞のこの2用法には、幼児の自己認知に見い出される発展の移行と類似する一定方向の漸次的推移が認められる。

以下では、「他動性」(transitivity) という概念を中心にして、心理学的及び言語学的に見た再帰代名詞の——単なる仮説でしかないが——意味的機能から統語的機能への移行過程について論じてみたい。

2

幼児は、まだその初期には自己認知能力がなく、およそ生後1年でそれが顕現してくる。自己認知力は「他動性」を記号化(encode)する力でもあり、「原形的」(prototypical)事象がその動機を与えている。

或る心理学者に拠ると「幼児は初め、内受容性⁴⁾によって与えられるものと、外的知覚によって与えられるものとを絶対的に区別せず」、自分の「視覚像の中に自分を感じずる様に、他人の身体の中にも自分を感じ」更に、「もし、六カ月以前の幼児には、まだ自分の身体の視覚的概念がないとすれば、……自分が体験していることと、他人が体験していること、あるいは幼児の眼に他人が体験していると見えるものを分けることができない」⁵⁾と言える。

しかし、生後12カ月頃になると、幼児は鏡の中に写っている姿を「自分」の姿と認める様になり、自己自身について反省する「自己観察の態度」が現れ始める。

幼児の所謂1語発話も、およそこの12カ月目頃から始まり、心理学上の自己認知が始まる時期と一致し、その内容は動的なものよりむしろ静的なものに限られ、例えば動作主や所有関係などには言及されず、事実確認や

位置関係などについての発話が大部分を占めている⁸⁾。

1語発話から2語発話、そして更にそれ以上の発話段階になると、幼児の知覚にとって「原型的」⁹⁾な事象タイプ、例えば、物体移動 (object transfer) や自発的運動 (voluntary movement) などは、特別な優位性を持ち、幼児はこれらの「原型的」事象、或いは、移行的事象 (transitive events) を一定の文構造を用いて表現する様になる (A. E. Mills 1985, S. 159)。「自分」と他者を明確に区別する様になるこの段階は、およそ生後24カ月頃であると推定され (D. Slobin 1982, S. 4 II), 例えば、パプアニューギニアで使われている言語の一つであるカルリ語 (Kaluli) には、行為の動作主を示す文法的指標、つまり能格の名詞接尾辞があり、幼児はおおよそ26カ月でこの指標を習得する (Ibid.).

次に世界の様々な言語は、「他動性」¹⁰⁾は幼児の言語習得に重要な役割を果たしていることを証明している。それは、言語の意味及び統語面に内在する色々な特徴を決定する。

その一つに、目的語の個体化 (individuation) が挙げられる。個体化とは統語構造から見て取れる情報と並んで、名詞句に割り当てられる動作主及び被動作主の所在を明らかにする特徴である (Hopper / Thompson 1980, S. 252 f.). それに拠ると、目的語として機能する名詞句は、確定的 (definite)、つまり指示的 (referential) であればある程、被動作主と解釈され、その文全体の「他動性」が強調されることになる (Ibid., S. 255).

例えば、ロシア語では生後23カ月頃の幼児は、事物への直接的物理行為を表す時には、行為を受ける対象物を意味する名詞句に対格の格指標を付与するが、この様な意図がない場合には、たとえ文法上は目的語であっても、対格の屈折をそれに与えない (Slobin 1981, S. 413). また、ソマリア (Somalia アフリカ東部にある共和国) で話されている1言語、チンウィ語 (Chimwi) では、目的語が指示的である場合、それを支配している動詞の語根に目的語接頭辞 (object prefix) が付加される。ところが、目的語が再帰代名詞の際には、たとえそれが指示的であっても、語根に目的語接頭辞は添加されることはない (Hopper / Thompson 1980, S. 277 f.).

以上の様に、「自分」と他者を識別する自己認知力は「他動性」と係わ

りがあり、他方「他動性」は、動作主・被動作主及び主語・目的語・動詞などの文法上の諸範疇形成に重要な役割を果たしていると言えるだろう。

3

「他動性」は、人称代名詞と場所及び時間を示す代名詞がそこから形成された「近接性」という概念にもはっきりと現れている。

鏡像を利用した或る心理学的実験に拠ると、幼児が鏡の中に自分自身の姿を明確に認知するのは、2歳を過ぎてからであり（メルロ＝ポンティ、1980年156ページ）、それ以前は、鏡像は幼児に「幽霊みたいな存在を鏡の中に連れこむ」可能性を持っている（同上書159ページ）。自分を認知できるようになる時期は、「他動性」を知覚できる時でもあり、また初めて ich, du を使用し始める時期でもある（Mills 1985 S. 155）。

ドイチュとベヒマン（W. Deutsch / T. Pechmann）は、3歳半から6歳半までのドイツ語を母国語とする子供55人を対象に、人称代名詞の習得状況を調査した⁹⁾。その結果、子供は、「近接性」（proximality）に従って、「自分」に近い所から、つまり、1, 2人称単数, 1, 2人称複数, そして3人称単数及び複数を習得、使用し始めることを明らかにした。更に興味深いのは、「近接性」は人称間の関係に妥当するばかりでなく、文字通り空間的に「自分」に近い順番にある位置関係、つまり、「ここ」、「そこ」、「向こう」という習得にも抽象的方向付けを与えてくれ、更には、時間相互間の概念の習得にもこの傾向が明白であり、例えばエスキモー語では、時間的に後か先かを表現する時には、指示的表現を屈折させることによってその相互関係を伝える。

以上の調査結果は、インドゲルマン語の人称代名詞と場所的な指示詞の派生過程について立てられた仮説とも一致する。つまり、人称代名詞と場所的な位置の指示詞が「同じ起源をもち、かつ幾重にも交錯しているのが十分明らかになるような意味のおよび形態上の事実が存在している」¹⁰⁾。

幾人かの心理学者は、幼児の自己概念（self-concept）、視覚的自己認識（visual self-recognition）は、明らかに生後18カ月から24カ月の間に、完全ではないまでも末発達な形で獲得されると報告している¹¹⁾。従って、それ以前の幼児には、自分の身体的視覚概念が極めて不確かであり、この

限りでは、「自分が体験していることと、他人が体験していること、或いは彼（幼児）の眼に他人が体験していると見えるものとを分けることができない」（メルロ＝ポンティ 1980年 169ページ）ことになる。

しかし自己と他者の混沌とした流動性から抜け出した生後24カ月頃の幼児は、場所的な位置の指示詞（hier）とそれと深い係わりがある人称代名詞（ich）とを使い分けることのできる分岐点にいと想定されうるであろう。ビューラー（Karl Bühler）は、この時期に差し掛かっている幼児の例を挙げているが、それに拠ると、彼が採り上げている幼児は ich という言葉を受け入れ、正しく使おうとしていたが、繰り返し ich と hier とを取り違えていたのである（Bühler 1982 S. 110）。つまりこの幼児は、単なる話し手の空間的方向を示す代名詞と多少なりとも主観的性格を帯びた代名詞との区別をはっきり付けることができなかったのである。

次に、動作主・被動作主の関係を支配しているのも「他動性」であり、これを示すために3歳3カ月から8歳までの子供を対象にした統語的主語と動作主の関連性について行われた実験の報告¹²⁾を見てみよう。この実験では、子供は二つのグループ（第1グループ〔3歳3カ月から5歳〕と第2グループ〔7歳2カ月から8歳〕）に分けられ、或る実験上の指導を受けた後、受動文の統語上の主語を実験者に尋ねられる。まず第1グループでは、そのほとんどが、動作主の役割を果たす名詞句を統語上の主語と見做し、彼等は名詞句の意味機能的役割に基づいて文を分析していることが明らかになる。第2グループになると、実験を何度か繰り返し一定のレベルに達した後は、動作主と統語上の主語を取り違えることはほとんどなくなり、第1グループとの差異が顕著になる。この場合名詞句は意味機能ではなく統語機能に基づいて分析されていると言えるであろう。

意味的關係に基づいて統語構造を形成する傾向は、幼児の定冠詞格変化の習得からも推測可能であり、或る報告に拠ると、生後26カ月の幼児は、まず主格の定冠詞から習得したが、男性主格に限ってそれを男性対格にも適用し、しかもこの誤用は5歳近くまで続くと言うのである（Mills 1985 S. 180）。同様に、屈折と弱い語順が文法的に規範化されているセルボクロアチア語（Serbo-Croatian）でも、2歳から3歳過ぎほどまで、文の最初の名詞句は、屈折されていようとなかろうと動作主と見做され、語順の

安定に従って徐々に、最初の名詞句は屈折によって動作主であることを排除され統語構造がより複雑になっていく。

以上をまとめると次の様になる。幼児は自己認知と共に「他動性」を言語構造にも適用して行き、その最初の形式は意味的特徴に基づいているが、次第に言語構造は抽象化され統語的諸範疇が形成される様になる。

4

これまで論述してきたことから、「他動性」は動作主・被動作主という意味的構造に枠組みを提供し、更にそれを一つの普遍的統語構造へと導く原動力になっていることが言えるのではないかと思う。

それでは次に、この「他動性」は、ドイツ語の再帰代名詞にどの様に影響しているのであろうか。以下この点について例文を参考にしながら検討してみよう。

(3) Ich setzte ihn auf die Erde.

(4) Darf ich Sie noch einmal in dieser Angelegenheit bemühen?

他動詞(3)、(4)は「主語の外」¹³⁾で行なわれる過程を示し、目的語は主語と照応しない。

(5) Er opfert sich und die seinen.

(6) Er wusch sich und die Kinder.

再帰代名詞(5)、(6)は他の文構成素と照応関係にない名詞句と並列して使われている。ハイダー (Hubert Haider) はこの様な機能を持つ再帰代名詞を照応的 sich (anaphorisches sich) (以後、A—Sと略す) と呼んでいる¹⁴⁾。

しかし、次の再帰代名詞の機能は(6)と異なる。

(7) Ich setze mich ruhig wieder aufs Pferd und trete hinab.

(8) Ich bemühte mich, meine Bewegungen über diese Worte zu verbergen.

(9) In der Ferne zeigten sich Reiter.

(10) Er hat sich für eine halbe Stunde auf die Couch gelegt.

(6)の主語は目的語と対立しているが、(7)(8)(9)及び(10)の主語は、「動詞が表す過程の座であり、主語が表すその主体は、この過程の内部にあり」(É. パンヴェニスト 1983年 169ページ)、この主語を先行詞とする再帰代名詞は、ブリンクマン (Hennig Brinkmann) の言葉を借りるなら、「対格として他人の仮面をかぶって現れるのだが、しかし、それはただ他人であることを否定するためにのみそうする」といえ、再帰代名詞とその先行詞は、両者を或る関係に置いている動詞を媒体として、「主語の領域」¹⁵⁾の中で、言わば或る共通分母によって結び付けられている。

この結合は(11)から(12)の例へ移るとさらに一層緊密になる。

- (11) sich waschen (身体を洗う), sich umbringen (自殺する)
sich bewegen (動く), sich entfernen (遠ざかる),
(12) sich alterieren (興奮する), sich ängstigen (恐れる),
sich beruhigen (安心する), sich täuschen (間違う)

身体的対象を表す再帰代名詞(11)と精神的対象を表す再帰代名詞(12)であり、第2節で述べた「個体化」という概念に従うなら、(11)は(12)より「他動性」が強い。再帰代名詞(12)の指示対象(Referent)はその抽象性ゆえに「主語の領域」の深い所にあり、動詞の表す意味に浸透され、次第に指示性(Referentialität)を失っていき、ついに再帰代名詞が有する指示性の弱まりは、次の変化をもたらす様になる。

- (13) mein Auge (Freudentränen) ergießen, (ergießen は他動詞である).
(14) Sonntags ergießt sich die Menge der Touristen in den Park.
(15) Die Elbe ergießt sich in die Nordsee.

つまり、再帰代名詞(14)、(15)は照応形(Anapher)から形式的文構成要素へと機能を変え再帰代名詞を伴って自動詞的役割を果しているのである。

歴史的に見るなら、ergießen は古くは詩語であり、再帰代名詞以外の名詞句を目的語にする他動詞であった(13)。しかし、現在ではそのほとんど

どが再帰代名詞を伴って使用されている。

(14)に戻るなら、そこでは再帰代名詞は数量詞を含んでいる先行詞より前にあり、厳密に考えるなら照応形ではないとも考えられ、(15)も同様に、主語は動作主ではないので、意味的にはその再帰代名詞は照応形ではないであろう。つまり、主語に意味的素性〔belebt〕を与えられなくなるほど、再帰代名詞は照応形ではなくなっていくということが想定できる。

(16) Viele Firmen zogen sich aus dem Telespiel-Markt zurück.

(17) Die Zugvögel ziehen schon zurück.

(16)も同様であるが、zurückziehen は他動詞としての用法の他に、自動詞としての用法(17)もあることを考え併せるなら、再帰代名詞は自動詞による直接的表現に代わって婉曲的表現が好まれる場合に使われる重要な要素であるかもしれない。つまり、(16)の様に責任者の所在が明らかでない時に、他動詞的な自動詞構文として再帰表現が利用されると思われる。

これまで例に挙げた再帰表現はハイダーによって、語彙的 sich(lexikalisches sich) (以後、L—Sと略す)と呼ばれ、常に再帰動詞と使用されるが(Haider 1985 S. 225)、更に同じ意味を表す自動詞がある(18), (19)。

(18) Ein paar helle Wolken spiegelten sich undeutlich in der grünen Fläche.

(19) Das Bild war schlecht zu erkennen, weil das Glas zu sehr spiegelte.

(20) Er konnte die Kiste nicht bewegen.

(21) Der Schlafende hat sich bewegt.

bewegen は先に引用した ergießen と同様、本来純粋な他動詞であったと考えられ、再帰代名詞(21)は確定的な指示対象を持つ。しかし、(21)は意味的には自動詞的である。つまり、(21)は統語的には他動詞であるが、意味的には他動詞ではない。これは再帰代名詞の指示性が弱いからであると考えられるが、先の例文(6) Er wusch sich und die Kinder では再帰代名詞と指示的表現(R-expression)¹⁶⁾の並列はできたが、(22), (23)の様な文は不適当であろう。

(22) Er bewegt sich und die Kiste.

(23) Er erholt sich und ihn.

これらの再帰代名詞は以下の文形式には使用されない。

(24) Sich hat Hans am meisten gelobt. (vorfeldfähig)

Wen rasiert er? sich! (erfragbar)

Otto rasiert sogar sich. (modifizierbar)

Otto rasiert wochentags nicht sich, sondern seine Kunden.

(attributiv negierbar)

以上をまとめると次の様になる。照応的 sich は先行詞によって意味的及び統語的に束縛されているが、語彙的 sich は統語的にのみ束縛されている。第2・3節で説明した「他動性」は背後に退き、代わって再帰代名詞は統語的役割を果たす様になる。

それでは、「他動性」はこれらの再帰構文では完全に消え去ったのであろうか。

5

前節で説明した再帰代名詞の2用法の他に、中動的 sich (mediales sich) (以後、M—Sと略す)と名付けられているものがある。M—Sは中動的構造 (Medialkonstruktion)¹⁷⁾と言われる再帰表現で使われ、A—SからL—Sへ至る過程の中間段階を成している。この意味で中動的構造の読みには曖昧さがある。

この点について、アブラハム (Werner Abraham) は次の様に考察している。

再帰代名詞は照応表現であるから、束縛理論 (Bindungstheorie)¹⁸⁾に従うなら、統率範疇 (governing category) 内で束縛されていない例がない。ところが再帰代名詞にはその内部で束縛されていない例がある。次の例がそれである。

(25) Die Tür öffnet sich leicht / ein wenig / einen Spalt / *ohne Mühe. (照応的)

- (26) Die Tür öffnet sich leicht / ein wenig / einen Spalt / ohne Mühe (中動態)

再帰代名詞(25)は統率範疇内で束縛され、A—Sと同じ照応的な働きをしているが他方、再帰代名詞(26)は(25)と異なり、主語と同一の指標付与(Koindizierung)はできない。

中動的構造(26)の条件は、そこで使われる動詞が主語に動作主を取ることである。つまり、前節で指摘した様に主語が意味素性、[human] 或いは[animate] を含んでいることである。従って、(27)は中動的構造ではないとも考えられる。

- (27) Der Regen rinnt sich besonders schadlos durch eine Kupferrinne.

この曖昧さは次の例にもある。

- (28) Diese Leute beherrschen sich leicht.

- (29) Diese Nonnen erbauen sich leicht.

中動的構造の意味には、動作主が内示的に示されている(31), (33)。

- (30) *Gemälde sehen sich gerne.

- (31) Gemälde besehen sich immer gerne.

- (32) *Solche Ehrlichkeit fühlt sich gerne.

- (33) Solche Felle fühlen sich gut an.

これと関連して、動作主を主語にできない動詞は、中動的構造では使用されない(30), (32)。

それでは、動作主はただ単に省略されているだけなのだろうか。そうではなく、次の例が示す様に、前置詞句以外のどこかで動作主が暗示されていると考えられる(34)。

- (34) *Das Buch liest sich von jedem leicht.

更に、(35)から(36)への書き換えが可能であることから、中動的構造は変形によって派生されたとも思われる。

(35) Der Fall klärt sich auf.

↓

(36) Der Fall wird (von der Polizei) aufgeklärt.

いずれにせよ、中動的構造では再帰代名詞は統率範疇に束縛されていないこと、そして前置詞句による動作主の外示的 (explizit) 提示ができないことからアブラハムは中動的構造は変形によって導き出されたのではないという結論に達している¹⁹⁾。

以上から、M—Sを中間段階としてA—SからL—Sに進むに従い、「他動性」は文面から読み取りにくくなっていることが分かる。次節ではM—Sについてももう少し述べてみたい。

6

次の例はM—Sによる自動詞再帰構文である。

(37) Hier fährt es sich gut Schi.

(38) Hier lebt es sich aber angenehm, Herr Aufsichtsvorsitzender.

(39) Solche Mädchen umschwärmt es sich einfach.

(40) *Hier lebt sich aber angenehm, Herr Aufsichtsvorsitzender.

(41) *Solche Mädchen umschwärmt es dich einfach.

ファンゼロー (Gisbert Fanselow)²⁰⁾ は(40)では先行詞 es がないので、また(41)では dich が先行詞と一致しないのでそれぞれ不適当な文であると指摘している。

また、(42)から、前節と同様、動作主は内示的に文構成要素のどこかに含まれていると想定される。

(42) *Hier lebt es sich von allen gemütlich.

彼はこの再帰代名詞M—Sを中動態標識 (Medium-Signal) の sich と呼び、テーマ的役割 (thematische Rolle)、つまり動作主・被動作主という役割はないが、照応表現として束縛理論に従って説明できると述べている。従って、前節で挙げた例文 (25) Die Tür öffnet sich leicht / ein wenig / einen Spalt / ohne Mühe. は、アブラハムの見解と違い、いずれの場合

も再帰代名詞は照応表現であることになる。つまり、中動的構造で現れる再帰代名詞 M—S は θ 役割 (θ -Rolle)²¹⁾ が付与されない統語上の位置、すなわち 項 (argument) の占めることのできない \bar{A} 位置 (\bar{A} -position) に置かれ、統語的に統率範疇内で束縛されている。

だが、彼の説明では、INFL つまり定形動詞であることを示す内示的な統語的構成要素は、意味的徴表である指示性 (Referentialität) をその内に含み、これを通じて主語は再帰代名詞をテーマ的に束縛するとしている。従って、再帰代名詞を \bar{A} 位置で統語的に束縛するという説明には説得性が欠ける様にも思われる。

また、アブラハムが指摘していることであるが、中域 (Mitte) は 前域 (Vorfeld)、後域 (Nachfeld) と異なり、 θ 役付与の位置である。ゆえに、 \bar{A} 位置つまり項が置かれる位置である²²⁾。

中動的構造について更に考察してみよう。

中動的構造の特徴は、副詞句を義務的に取ること、及び時間に依存しない読み (time-independent genericness) (Abraham 1986 S. 31) の2点にある。前者はこれまでの例から明らかであり、後者は scheinen などの動詞に特有な繫辞 (copula) に似た不定詞句から理解されるだろう。

(43) Steuerinspektoren versprechen sich leicht zu besprechen.

他方 raten は、一時的な動作を表す不定詞句を取るのに、中動的構造と共に使用されない。

(44) *Die Beamten raten den Mietern sich leicht zu bestechen.

更に、中動的構造は、状態を表すという点で状態受動 (Zustandspassiv) に類似する。

(45) Das Fenster ist geöffnet.

しかし、状態受動が動作主を明示する前置詞句を許すのに対し、中動的構造にはそれが許されない(46), (47)。

(46) Das Zimmer ist von Kerzen beleuchtet.

(47) Kinder ergötzen sich leicht im Wasser /*durch das Wasser.

つまり、状態受動が能動から変形によって派生されるのに対し、中動的構造は、語彙的に形成されると考えられる。

この推察の妥当性は、構造的格 (structural case), つまり θ 役を持つ項が移動できる統語構造上の位置に与えられる格と内在的格 (inherent case), すなわち語彙的 (或いは、前言語的 (prelinguistic) (Slobin 1982, S. 412)) に、名詞句に与えられる格との違いからも確認される。

(48) Der Lehrer lehrt mich den Flickflack.

(49) Der Flickflack wird mir /*mich gelehrt.

(50) Der Flickflack lehrt sich leicht jungen Kindern.

(51) *Die Kinder lehren sich den Flickflack ganz leicht.

jungen Kindern (50)は(49)が示す様に与格の内在的格であるため(51)への書き換えはできない。再帰代名詞(50)は動詞と密接に結びつき一つの意味的単位を形成し、一般的状态を表している。つまり、再帰代名詞(50)は指示性をほとんど失った結果、形式的要素として働く様になったのである。言い換えるなら、A—Sが先行詞と同一ではあるが、何等かの「指示物」と対応するのに対し、M—Sは、L—Sと同様、統語構造内でその力を発揮する機能語 (operator) (Abraham 1986 S. 43 f.) の役割を果たすのである。更に、L—SはM—Sより一層形式的であり、この傾向がもっと強まると純粋な自動詞になるだろう。

7

「他動性」を本質的契機とする幼児の自己認知は、再帰代名詞の習得過程に或る方向性、すなわち、意味的なものから統語的なものへ、つまり、 $A-S \longrightarrow M-S \longrightarrow L-S$ という展開を仮定させる。この展開は、ヴィルマンズ (W. Wilmanns)²²⁾ が指摘している様に、統語構造的には、再帰代名詞と動詞との緊密化という現象として現れる。M—S, L—S + 他動詞をベハーゲル (Otto Behaghel)²³⁾ は、再帰的接合体 (die reflexive Fügung) と呼び、カーム (George O. Curme) も「純粋な再帰動詞と共に使われた再帰代名詞は目的語と感じられず、従って、文の中の独立した

要素ではなく動詞の1部分である」²⁴⁾と述べている。

再帰代名詞の機能的流動性には一定の発展的方向性があることは、幼児の自己認知との関連の中でこれまで幾度か触れてきた。幼児は初め、自己と他者とを明確には区別しないが、この区別をつけるに従い言語上にも或る変化が起こるようになる。それは INFL の習得という形で顕在化し、これによって「他動性」は、はっきりと言語的に表現される。しかし、更に文法が習得されるに従い、再帰表現は、「他動性」を潜在的に含む自動詞的構文として使用されるようになる。

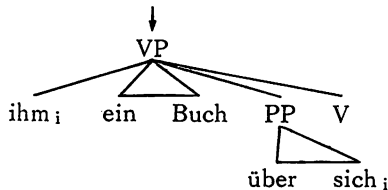
以下、フェンゼローの REGIEREN という概念を手がかりにしてこの点について更に述べてみたい。

彼は REGIEREN を次の様に定義している。

「Aの統率子 α が、Bが真に含まれている範疇、つまりBの統率子を統率する時、AはBを統率 (REGIEREN) する」

(52)の例で具体的に述べると次の様になる。

(52) Ich schenke ihm_i ein Buch über sich_i.



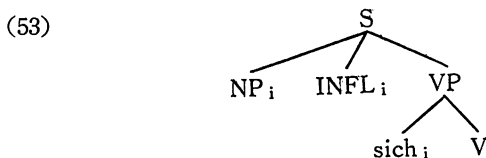
ihm の統率子Vは sich を含んでいる範疇、つまり sich を統率している範疇 PP を統率しているので ihm は sich を統率している。従って、目的語を先行詞にする束縛は次の様に定義することができる。

「NP_a と NP_b が同一指標を付与され、しかも NP_a が NP_b を統率 (REGIEREN) するなら、NP_a は NP_b を束縛する」

なるほど目的語によって束縛される再帰代名詞にはこの両者を或る関係に置く動詞が介在しないので、その多くがA—Sである。しかし、主語が

再帰代名詞を束縛する場合、それは、A—S、M—S及びL—Sのどれかの形を取ることができる。そしてこの点に、これまで見てきた様々な問題が起因している。

それにもかかわらずファンゼローは、主語を先行詞にする再帰代名詞の束縛を目的語による束縛と同様の手続きで説明している。下の(53)がその例である。



彼は(53)を次の様に説明している。NP_iの統率子 INFL_iが sich_iの統率子 VPを統率するので、NP_iは sich_iを統率する。従って、NP_iは sichを束縛する。

だが彼の統語論的説明も幼児によく見られる主語の無い発話、つまり INFLの欠けた発話を説明する時には不都合が生じる。

幼児は一般に入力言語を模倣するが、2～3歳頃の入力言語の多くは、動詞が文末に現れる、というのも、母親の幼児への話しかけでは、命令や提案が多いからである。(Mills 1985, S. 154 f.)

(54) Jetzt aufstehen!

(55) Nicht beißen!

(56) Mama Bonbon essen? (Soll ich das Bonbon essen?)

(57) Du sollst nicht weinen.

従って、再帰代名詞を含む幼児の発話も主語の欠けた動詞だけの文が多い。

(58) Schäm mich nicht (I am not embarrassed).

つまり(58)は、動詞句だけで成立していると推定される(59)。

(59) [Schäm mich nicht _{VP}]

(59)では語彙的主語が無く、動詞も人称変化していないので、INFLはこ

の段階ではまだ形成されていないとも考えられる。ここではファンゼローの説明は有効でなくなる。この頃の幼児は主体性の無い単なる空間を指す (Greifen in die Ferne) 言語感覚によって、入力言語を模倣しているのであろう。また、「他動性」はこの段階では明確な自己が確立されていないので、幼児には意識されない。

しかし、次第に幼児の言語感覚は、自分と他人を区別しない身体的掴み (Greifen) から、自己を認知する精神的掴み (Begreifen)²⁵⁾ へと展開し、それに伴って主語は、統語及び語彙的に表され、INFL が形成されていくと考えられる。例えば、(60)は自己認知が確立されない間は(61)の様な構造を取るであろう。

(60) Hans liebt Maria.

(61) [liebt Maria_{VP}]

しかし、明示的主語が規則的に使われ始めると、(62)に見られる様に、動詞 liebt は e から e_i の位置に移動し、更に INFL がそれを主語の次の位置まで移動させる。

(62) Hans [INFL_i liebt_i] [_{VP}Maria [e_i]] [e]²⁶⁾

8

さて、INFL が形成されるに従い「他動性」は言語的にも明確な形で表現される様になる。そこで、再帰代名詞の三用法に戻るなら、M-SとL-Sによる再帰表現は、まだ「自分」を明確に認知していない幼児によく見られる、INFL の欠落した構文に類似していることが分かる。この意味で自己認知は中動から他動への分岐点であり、再帰表現は逆に、他動から中動そして自動への逆戻りであると言うこともできよう。

このことは、主体性の所在が明らかでない事実を報じる新聞や雑誌に再帰表現が多用されていることから十分理解され、冒頭に掲げたカフカ (Franz Kafka) とブルースト (Marcel Proust) からの引用は、再帰代名詞の言語的多機能性を極めてはっきりと認識させるのである。つまり、再帰代名詞は「他動性」を主語の領域へと引き戻し、更に主語へと収束させることにより、ほとんど「他動性」を消し去ってしまうのである。

注

- 1) Franz Kafka: *Die Verwandlung*. In: *Sämtliche Erzählungen*. Frankfurt am Main 1984, S. 56 f.
- 2) F. カフカ「変身」山下肇訳 1989年 岩波書店49ページ。
- 3) Marcel Proust: *A la recherche du temps perdu*. Paris 1949. S. 5. 及び M. ブルースト「失われた時を求めて I」淀野隆三・井上究一郎訳 1977年 新潮社 11ページ。
- 4) メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳 1980年 みすず書房 142ページ。
- 5) 内的受容性 (interoceptive) とは身体の内環境で起こるいろいろな刺激の状態を感じる性質を言う。(メルロ＝ポンティ 318ページ)
- 6) Anne E Mills: *The Acquisition of German*. In: *The Crosslinguistic Study of language Acquisition Volume 1: The Data*. London 1985, S. 153.
一語発話等については R. Brown: *A first language*. Cambridge 1973 参照。
- 7) Dan I. Slobin: *The Origins of Grammatical Encoding of Events*. In: *Syntax and Semantics Volume 15*. London 1982, S. 409-422.
- 8) Paul J. Hopper / Sandra A. Thompson: *Transitivity in Grammar and Discourse*. In: *Language* 56. Baltimore 1980, S. 251-299.
- 9) Werner Deutsch / Thomas Pechmann: *Ihr, dir, or mir? On the acquisition of pronouns in German children*. In: *Cognition* 6. Lausanne 1978 S. 155-160.
- 10) Karl Bühler: *Sprachtheorie*. Stuttgart 1982, S. 79-148 参照。
K. ビューラー「言語理論」協阪 豊他訳 1983年 クロノス。
ビューラーはブルクマン (Karl Brugmann) から幾つかの例を挙げている。例えばラテン語の hic (hier) と ego (ich) は、まだ分化していない両義的な一つの指示語 gho から派生したと述べられている。
- 11) B. I. Bertenthal / K. W. Fischer: *Development of Self-Recognition in the Infant*. In: *Developmental Psychology* Vol. 14, No. 1. Washington D. C. 1984 S. 44-50.
- 12) Edward H. Matthei: *Subject and agent in emerging grammars: evi-*

- dence for a change in children's biases. In: *Journal of Child Language* 14. Cambridge 1987 S. 295-308.
- 13) É. パンヴェニスト「一般言語学の諸問題」岸本通夫他訳 1983年 みすず書房 165-173ページ.
 - 14) Hubert Haider: *Über sein oder nicht sein: Zur Grammatik des Pronomens sich*. In: *Erklärende Syntax des Deutschen*. Tübingen 1985, S. 223-254.
 - 15) Hennig Brinkmann: *Die „Haben“ Perspektive im Deutschen*. In: *Sprache-Schlüssel zur Welt, Festschrift für Leo Weisgerber*. Düsseldorf 1959 S. 176-194.
 - 16) Peter Sells: *Lectures on contemporary syntactic theories*. Stanford 1987 S. 69. 及び、「チョムスキー小事典」今井邦彦編 1986年 大修館書店 134ページ.
 - 17) L-Sは中間態動詞 (mediale Verben) と共に使われ、役割を付与された主語を吸収 (Absorbierung) する. M-Sによる再帰構文は副詞 (句) を義務的に取るがL-S構文は随意的である (Haider 1985 S. 246 f.).
 - 18) Noam Chomsky: *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht 1981.
 - 19) Werner Abraham: *Middle construction in German*. In: *Groningen Arbeiten Zur Germanistischen Linguistik* Nr. 28. Groningen 1986, S. 25-62.
 - 20) Gisbert Fanselow: *Konfigurationslätät, Untersuchungen zur Universalgrammatik am Beispiel des Deutschen*. Tübingen 1987, S. 108-149.
 - 21) たとえば John rolled the ball to the corner という文の the ball, the corner, John は述語 roll に対してそれぞれ移動の主題 (theme), 到着点, 動作主という役割を担っている. このような意味的な役割を θ 役割という. また項 (argument) というのは, (i) the man, John などの普通の名詞句, (ii) 人称代名詞, (iii) 相互代名詞や再帰代名詞などの照応表現, (iv) 変項 (variable) などのことを言う. A位置とはD構造で生成されるS内部のNPの位置のことであり, それ以外の位置すなわち, COMPの位置や付加詞の位置は \bar{A} (エー・バー) 位置という (注16のチョムスキー小事典より).
 - 22) W. Wilmanns: *Deutsche Grammatik, Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. Dritte Abteilung: Flexion. 2. Hälfte: Nomen und Pronomen*. Straßburg 1909, S. 496-508.

- 23) Otto Behagehl: *Deutsche Syntax, Eine geschichtliche Darstellung*, Band 2. Heidelberg 1924, S. 152.
- 24) George O. Curme: *A Grammar of the German Language, designed for a thoro and practical study of the language as spoken and written to-day*. London, S. 330.
- 25) Ernst Cassirer: *Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil: Die Sprache*. Darmstadt 1977, S. 129.
- 26) 本文中の引用例文出典は次のとおりである。
 - ① Duden, *Das Stilwörterbuch*, Mannheim 1970. (4)128, (14)229, (17)839, (19)635, (20) (21) 144
 - ② W. Wilmanns (1909). (3) (9)497
 - ③ O. Behagehl (1924). (5)141, (12)146
 - ④ H. Haider (1985). (6) (22) (23) (24)225, (34) (42)245
 - ⑤ F. Hölderlin: *Hyperion*. Stuttgart 1977. (7)27
 - ⑥ J. W. Goethe: *Die Leiden des jungen Werther*. München 1980. (8)23
 - ⑦ W. Abraham (1986). (11)59, (25) (26)28 f., (27)37, (28) (29)26, (30)-(33)33 f. (43) (44)31, (47)43, (48)-(51)42
 - ⑧ H. Paul: *Deutsches Wörterbuch*. Halle 1960. (13)166
 - ⑨ W. Jung: *Grammatik der deutschen Sprache*. Leipzig 1980. (15)191
 - ⑩ *Der Spiegel*. Nr 18. 1989. (16)222
 - ⑪ H. Hesse: *Unterm Rad*. Frankfurt am Main 1982. (18)56
 - ⑫ K. Brinker: *Zum Problem der angeblich passivnahen Reflexivkonstruktionen in der deutschen Gegenwartssprache*. In: *Muttersprache*. Mannheim 1969. (35) (36)3
 - ⑬ G. Fanselow (1987). (37)-(41)116, (52)112
 - ⑭ A. Mills (1985). (58)181
 - ⑮ *Reviews*, In: *Language*. Volume 65, Number 2 (1989) S.411. (62)

Über das Reflexivpronomen und das Intransitiv

— eine psychologische Betrachtung —

Akira SHIDA

Das Reflexivpronomen läßt sich nach drei verschiedenen Typen klassifizieren: als anaphorisches ‚sich‘ (A-S), lexikalisches ‚sich‘ (L-S) und mediales ‚sich‘ (M-S).

Diese Reflexivpronomina stimmen meistens mit dem Subjekt des gleichen Satzes in Person und Numerus überein. Aber zwischen ihnen müssen wir einen wichtigen Unterschied machen: A-S hat ein referenzielles Antezedens, aber L-S und M-S keins.

Diese Diferenz bringt weitere grammatische Eigenschaften mit sich. A-S ist zur ‚Koordination‘ mit Nominalphrase fähig (Er wusch sich und die Kinder), doch L-S und M-S nicht. ‚Vorfeldfähig‘ ist A-S (Sich hat Hans am meisten gelobt); L-S und M-S können nicht im Vorfeld auftreten. In gleicher Weise steht die ‚Erfragbarkeit‘ mit dem Charakter der ‚Referenz‘ in Verbindung, mithin fallen L-S und M-S nochmals aus. Auch im Zusammenhang der ‚Modifizierbarkeit‘ und der ‚attributiven Negierbarkeit‘ treten die Akzeptabilität von A-S und die Unakzeptabilität von L-S und M-S in Erscheinung.

Bei diesen Unterscheidungen spielt der psychologische und linguistische Terminus der ‚Transitivität‘ eine zentrale Rolle. Während beim A-S, das die referenzielle Beschaffenheit trägt, die Transitivität in den Vordergrund drängt, scheint sie bei L-S und M-S, die keine ‚Referenz‘ haben, verschwunden zu sein. D. I. Slobin erachtet ‚prototypical event‘ als wesentlich beim Erwerb einer Sprache. ‚Prototypica levent‘ heißt ‚transitive event‘: Zuerst erkennen Kinder ‚prototypical event‘, dann gestalten sie daraus linguistische Kategorien.

Dieses Faktum ist mit Hilfe von psycholinguistischen Experimenten festzustellen.

Diese Argumentation gibt uns die Möglichkeit, die ‚Transitivität‘ im Spracherwerb als entscheidend anzusehen. Wenn diese Annahme richtig ist, läßt es sich vermuten, daß M-S zum Verständnis von L-S unentbehrlich ist. In der Tat müßten wir annehmen, daß es ursprünglich transitive Verben gab, die M-S wie Nominalphrasen im Akkusativ regierten, aber im Laufe der diachronischen Entwicklung ihre ‚Transitivität‘ vor uns verbargen und schließlich mit M-S unter der Maske des Intransitivs erschienen.

Diese intransitiv anmutende Struktur nannte zum Beispiel Otto Behaghel ‚die reflexive Fügung‘ während L-S wie M-S von Helbig / Buscha ‚Pseudoreflexiv‘ genannt wurden.

Es zeigt sich, daß sich beim Spracherwerb die Kinder mehr auf semantische Inhalte als auf syntaktische Merkmale stützen. Es erscheint, daß der fortschreitende Übergang von Semantik zu Syntax auch im Bereich des Reflexivpronomens herrscht. H. Haider zeigte auf, daß es einen Entwicklungszusammenhang, nämlich Lexikalisierungsprozeß von A-S über M-S zu L-S gibt, mit anderen Worten: Je enger die Verbindung von Verb mit Reflexivpronomen wird, desto näher kommt das Gefüge „Verb+Reflexivpronomen“ dem Intransitiv.